
放課後プレイ

筐咲 月彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
放課後プレイ

【Nコード】
N6389Z

【作者名】
筐咲 月彦

【あらすじ】
夜の教室に、二つの影が絡み合う。
夜だけれど、外から赤々と天井が照らされ、暗くは無い。大きく、小さく、揺らめくその光は二つの…いや、一つの影の動きを、増して壁に映す。

◆mixiにも載せております。

(前書き)

直接的な表現はありませんが、弱エロです。お気をつけ下さい。

「ん……ちよつと、やつ……」

暗がり、卑猥な声が響く。普段の喧騒があればこそ、この静けさと暗さが更に際立つ。

「嫌だつ、こんなところで……ふ、うん」

嫌だと言葉では言いつつも、嫌がる素振りはない。

――雰囲気に吞まれている。

――熱に浮かされている。

卑猥な響きの本来相応しくない、ここは教室。しかし声の主はぴたりと嵌る、女子高生。

必然、本来似合わないはずであるその表情は、今のこの教室に限って、とても自然である。

外は夜。深夜ではなく夕焼けがようやく沈み、母が夕食に頭を悩ませ、父がまだ家路を急ぐ時間。子は、遊びから開放され名残惜しげに手を振らなければならない時間。

――遊びに夢中で、ふと気付けば辺りには誰も居なくて。

――不安に駆られながらも、なぜだろう、その手は止まらなくて。

――たった一人で。その不安をかき消すようにブランコを漕ぐ。帰らなくちゃいけないのに。何を否定するのか、硬く目を閉じて。

夕焼けがようやく沈み。それでも、生き急ぐのかそれとも、否定するというならばその時間の終わりを否定するのか。夕焼けがようやく沈んだ黒の天蓋に、再び、朱を見出す。

祭りの後には。終わりという舞台が。いや、終わりという“続き”が待っている。

「ん……はあ、はあ……ふっ」

暗闇に、影が蠢く。

教室の窓際。窓の下。

外からは揺ら揺ら、朱の輝きが天井を染める。

暗闇なのに、明るい。

そんな矛盾を飲み下しなおも否定するように、暗がり隠れる。

見ないように。見えないように。見つからないように。二つの影が、絡み合う。

「も……う。ダメ、だよ。こんな……こんなことしてる場合じゃ……はあ、あ、は……」

その表情は蠱惑的で、陶然としていて。ダメと言いながらも、全てを許し包むような、母性と女性とに満ちた表情。唇が、ぬらりと明かりを受けて輝く。唇と、首筋と、鎖骨と、耳元と、それらを繋ぐ道筋と、目元とが濡れている。

「こんなところで、こんなこ、と……っふ」

自分の言葉で興奮の度合いが増したか、ひくり、と眉が動く。

揺ら揺らと。

天井を染める朱が踊る。朱と共に、黒が。影が躍る。

せわしく、揺らりと、ばらばらと。複数の影が、教室の天井を照らす炎の周りを囲んでいるのだ。キャンプファイヤーのように。去年の文化祭の後夜祭で、資材をまとめて燃やして、周りを囲んでチークダンスを踊っていたことを彼は思い出す。それを上から見ていることを。

そのときも彼らは参加していなかった。

そのときも二人で、そのときは当時の教室で。

外の喧騒と、中の静けさを感じていた。

今も。

「……はあ、はあ、はあ……っく」

誰に聞こえることも無いのに、声を潜めてしまう。

“ここ”は、外とは違う場所だ。静かな熱と、確かな闇が住まう聖地だ。

外の騒ぎは、僕らとは関係ない。と、彼はここにたどり着いた時

に言った。彼女は、うん、とそれだけ言った。そして、彼女の方から唇を重ねた。

外の熱よりもお互いの体温が確かに。外の叫び声よりもお互いの囁きが確かに。炎に巻き上げられ逆巻く風よりもお互いの吐息が確かに。肌で。耳で。唇で。感じられた。

「……はあ、はあ……も、うっ」

天井の朱が、一段と揺れる。影の艶舞が、激しくなる。同時に。

お互いの熱が。お互いの喘ぎが。お互いの吐息が。

高まってゆく。高ぶってゆく。

重なり、揺れる。

もう。

——もう。

「……つく！ い……っ……！！」

それは、逃避だった。

——もう。

もう、お仕舞いだ。これ以上は、もう。

「はあ、はあ、はあ……っふう」

ごろり。

手を繋ぎ二人で寝そべると、その視線の先では相変わらず、朱と黒とが踊っていた。

行為を終えると、急激に冷え込んでくる。三月の半ば。桜も咲こうかという時期だが、まだ冬と言って良い。去年の文化祭のときは違う。裸は、当然寒い。

が、二人は動こうともしない。ただただ天井の揺らぎを眺める。

——おもむろにポツリと、彼女が呟いた。

「……あれ、私たちがやったんだね」

彼は応えない。

「……ちよっと、凄いな」

彼は応えない。

三月の半ば、裸で居れば当然寒いし、床に制服を敷いてはいても、はみ出て床に触れた素肌は痛いくらいだ。でも、お互いの手の温もりが余計に確かに感じられる。痛いくらいに。

三月の半ば、桜も咲こうかという季節だが。校庭の桜は、もう、咲くことは無い。

「……ちよっと、怖いね」

彼女は言って体を起こし、キスをした。

震えていた。二人とも。

繋がっていた。

彼の目に映る朱。

彼女の目の端にも、同じ色が輝いていた。

『放火後プレイ』

（後書き）

タイトルだけ、漫画から頂きました。中身は別物です。
が、それだけでも二次創作になるようでしたら、お声お掛けくださ
い。場所移しますんで。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6389z/>

放課後プレイ

2011年12月21日15時50分発行